



Title	社会的受容性の高い野生動物保全の課題：インドネシア共和国カリマンタン島焼畑農耕民による商業的野生動物猟の民族誌的研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	澤井， 啓
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(人間科学)
Dissertation Number	甲第16496号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94860
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kei_Sawai_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）

氏名： 澤井 啓

学位論文題名

社会的受容性の高い野生動物保全の課題：

インドネシア共和国カリマンタン島焼畑農耕民による商業的野生動物猟の民族誌的研究

・本論文の観点と方法

本論文は、インドネシア共和国カリマンタン島の中でも特に高い生物多様性を誇る、アボカヤン地域に位置する焼畑農耕民ケニャ族の村（A 村）を研究対象地として、地域住民が行う商業的野生動物猟の対象となってきた希少野生動物をどう保全していけばよいのか、またそこにどのような課題があるのかを、「社会的受容性」に着目して考察したものである。

カリマンタン島では、地域住民が行う商業目的の野生動物猟が希少種の存続を脅かすことが懸念されており、いくつかの保全策が講じられてきた。しかし、猟は重要な現金収入源となっており、トップダウンの規制策は住民に無視されるなどの抵抗にあう。よって、今後の希少種保全においては、地域社会が許容でき、その試行・実践が長期的に見て実現可能である社会的受容性の高い保全策（socially acceptable conservation）を模索することが重要になってくる。その際、野生動物猟が人びとにとってどのような意味や重要性を持っているのか、また種の絶滅やそれを防ぐための方策について人びとがどのような認識を持っているのかを明らかにする必要がある。本研究では、商業的野生動物猟が行われている地域社会に深く入り込んで行われた参与観察や聞き取り調査の結果をもとにこれらの点が明らかにされ、今後の保全策の課題と可能性が論じられる。

・本論文の内容

本論文は 10 章で構成されている。

第 1 章では、先行研究のレビューに基づき、熱帯地域における野生動物保全をめぐるどのようなことが議論されてきたのか、また本論文全体を貫く視点である「社会的受容性」が何を指すのか、そして、本論文の研究対象地であるカリマンタン島の野生動物保全をめぐる状況が説明される。そのうえで、カリマンタン島における商業目的の狩猟に着目し、地域住民による商業的希少野生動物猟の意味と重要性を明らかにし、地域社会にとって社会的受容性の高い将来の保全策の課題と可能性を議論するという本論文の目的が説明される。

第 2 章では、研究対象地の歴史、社会、文化、経済といった地域概況が説明される。また慣習法が住民の行動規範として機能し、土地や森林資源の利用・管理において重要な役割を果たしていることが示される。

第 3 章では、研究対象地の住民が主に焼畑農業を基盤として、身の回りの自然資源の利用によって生計を維持している実態と、本研究が焦点をあてる商業的狩猟の対象となる希少種を含む、多様な森林資源利用の実態が詳しく説明される。

続く、第 4 章から第 7 章では、商業目的の野生動物猟の歴史、実態、地域住民にとっての猟の意味・重要性が詳細に明らかにされる。

第 4 章では、1980 年代後半から 1990 年代にかけて、塩との交換を目的とした狩猟により、アボカヤン地域全域で絶滅したと考えられるキガシラヒヨドリの絶滅に至る過程と絶滅に対する住民の意識が分析される。キガシラヒヨドリが絶滅したことについて、住民の意識は多様だが、希少種保全の重要性を地域社会が認識する契機となったことが明らかにされる。

第 5 章では、経済的価値を持つとともに害獣でもあるヤマアラシ（マレーヤマアラシ、ボルネオヤマアラシ、ネズミヤマアラシ）の猟に対する多様な意味づけが分析される。ヤマアラシの胃石に

は薬効があると信じられており、高い市場価値を持つ。捕獲したヤマアラシに胃石があることは稀であり、安定した収入源とはなりにくい。しかし胃石がみつからなくてもその肉は食用に利用されている。また、ヤマアラシはキャッサバやその他の農作物に深刻な被害を与える害獣であり、獣害対策の一環としても猟が行われている。このように、ヤマアラシ猟に人びとが多様な意味を見出していることが明らかにされる。

第6章では、近年高い市価がつき、狩猟ブームが起きたマレーセンザンコウの猟の歴史的展開過程と地域住民にとっての経済的意味が分析される。A村では2010年以降、薬効があるとされるセンザンコウの鱗の取引が活発化し、住民の約3割がこの猟活動に従事するブームが発生した。しかし、COVID-19パンデミックの影響で2020年以降、国際的な取引が停滞し、ブームは終息した。センザンコウは、食用や薬用として伝統的に利用されてきた歴史はなく、高値で取引されるようになって以降、もっぱら鱗を売るために捕獲されるようになった狩猟獣である。しかし捕獲頻度が大変低く、不確実性の高い現金収入源であることが明らかにされる。

第7章では、生物体の一部が伝統衣装や儀式に伝統的に用いられてきた種であり、その後、狩猟ブームによって個体数が減少したオナガサイチョウの猟のブームの背景と地域住民にとっての経済的・文化的意味が分析される。オナガサイチョウの羽やカスク（頭部および嘴上部にある突起物）はケニヤ族にとって象徴的な意味を持っており、伝統衣装の材料として用いられたり、意匠として用いられたりしてきた。2010年代からは、カスクが高額で取引されるようになったことで狩猟ブームが起き、個体数が劇的に減少した。捕獲が難しくなったこととCOVID-19パンデミックによる国際取引の停滞によりオナガサイチョウ猟ブームは急速に終息した。本章ではその歴史的過程とオナガサイチョウ猟の住民にとっての意味が詳細に描かれる。

第8章では野生動物の個体数の動向と保全策に対する人びとの多様で複雑な認識と、地域の人びとにとって望ましい保全策について詳細な分析がなされる。後者に関して、著者は狩猟者との対話を通じていくつかの保全のための選択肢を特定し、希少種ごとにどのような保全策が望ましいか、また、なぜそれを「望ましい」と考えるのか、その理由について詳細な聞き取りを行っている。そうした保全策には、調査時点で住民が計画しているタナ・ウレンと呼ばれる慣習保全林（慣習法に基づいて土地・資源利用が規制される森林）設置も含まれている。この章では、狩猟者の多くが住民主体で進められる慣習保全林の設置に対して幅広い支持が得られていること、それに加えて、代替収入源の創出やインドネシア国内法による保護などいくつかの保全策の組み合わせを求めていること、そして、状況に応じて規制の内容を変更できる柔軟な保全アプローチが必要だとする認識が広く共有されていることが明らかにされる。

第9章は考察にあたる部分である。次の三つの点について考察がなされている。第一に、第4章から7章までの各論で明らかになったことを総括して、筆者が独自に設定した五つの視点（伝統的な営みかブームによるものか、猟を通じて実現しようとしている価値が多元的なものか否か、猟の機会が多くの人に開かれたものか閉じたものかなど）から、希少野生動物を対象にした商業目的の猟の特徴が整理され、現行の保全策の問題点が議論される。第二に、犯罪学の分野で発展した「日常活動理論」の枠組みを活用して、複数の保全策について社会的受容性の観点から評価が加えられる。第三に、以上の議論を踏まえて、社会的受容性の高い保全策を講じるうえでの課題が具体的に考察される。

実質的に終章を成す第10章では、これまでの議論のまとめと今後の研究課題について若干の展望が述べられる。